

令和元年度第2回生物多様性保全検討部会

【 摘 録 】

日 時：令和元年 11 月 14 日 10：00～12：00

場 所：京都市役所分庁舎 4 階「第 1 会議室」

出席者：①足立直樹委員，②池本優香委員，③石原正恵委員，④板倉豊委員，⑤田中正之委員，
⑥久山喜久雄委員，⑦伏見康司委員，⑧森本幸裕委員，⑨湯本貴和部会長

議 題：次期生物多様性プランの策定について

- (1) 次期プランの策定スケジュールについて
- (2) 長期的ビジョン，2030 年度目標，施策体系について
- (3) 重点保全地域について

<開会>

・中村環境技術担当部長からあいさつ

議題(1) 次期プランの策定スケジュールについて

事 務 局 <資料 1 に基づき説明>

足 立 委 員 来年の生物多様性条約 COP15 に向けた準備が進んでいる。生物多様性条約事務局が長期の戦略的な主流化のアプローチ（LTAM：Long-Term Approach to Mainstreaming）を策定中である。ポスト 2020 年目標については不透明である。生物多様性条約や国主体ではなかなか議論が進まないの、ヨーロッパでは、民間が業を煮やして欧州の企業と EU 政府が一緒になり、かなり高い目標を掲げつつある。気候変動が科学と整合した目標設定（SBT：Science Based Targets）をすることでかなり取組が進むようになったので、生物多様性も似たようなことをやろうとしている。

また、WWF インターナショナルが、科学的にも意味があるものとして、「生息域のロスゼロにする。」「人為的絶滅をゼロにする。」「人間のエコロジカル・フットプリントを半分にする。」という数値目標を出している。こういった目標が、もしかすると COP15 でも採用されるかもしれない。そうすると、今までの愛知目標とは大きく異なってくるということを意識しておく必要がある。

湯本部会長 ポスト 2020 年の具体的な数値目標等は国で議論された後、公になるまで時間がかかる。国等の会議に参加されている部会委員の皆様からも情報提供いただき、次期「京都市生物多様性プラン」に反映させていきたい。

次の議題である、長期ビジョンで、何を客観的指標に置くのかが肝だと思う。

議題(2) 長期的ビジョン，2030 年度目標，施策体系について

事 務 局 <資料 2 に基づき説明>

足 立 委 員 事務局の資料とは別に、私自身の問題意識をまとめるつもりで資料を用意した。一般の方に生物多様性の重要性を伝えるためには、やはり生物多様性を身近なもの、自分

たちの日常と関係があるものにしないといけない。その切り口として、例えば「50年後に今の京都が消滅してしまう」という意識が、市民、あるいは事業者の方にあるのかを問いたい。京都には世界中から多くの人が集まるが、その求心力である京都の文化や景観のほとんどは生物多様性に支えられている。したがって、それがなくなれば、もはや何の魅力もなくなってしまうのではないかと危惧する。例えば、お祭りを見に来てもお祭りを支える資源がない、美味しい食材が京都にない、あるいは日本にないとなった時に、果たして今のような「京都」は成立するだろうか。自然だけではなく、町並み、景観の問題もある。これらのことを考えると、自然こそ、生物多様性こそが京都を支えているということが一番の切り口になるのではないかと思う。

「持続可能な都市文明の構築を目指す京都宣言」は長期的に考えられていて非常に素晴らしいが、「生物多様性」という言葉は一言も入っていない。地球温暖化対策が生物多様性の保全を支えているにも関わらず、生物多様性について言及されていないため、宣言を十分に生かせてないのではないか。どこが一番京都らしさ・京都の魅力を守るために必要なのか、このまま放っておくと生物多様性がどうになってしまうのか、その関係と現状、今後の予測を分析する必要がある。学問的に「この生物が重要だから」という理由だけでは、市民や事業者の方にはアピールできない。生物学的・学術的な重要性は当然尊重しなければいけないが、同時に京都ならではの重要性もきちんと踏まえ、大学などとも連携しながらきちんと分析していく必要がある。事業者には、生物多様性がいかに自分たちの産業を支えているかということ意識・認識してもらい、協力していただければと思う。

具体的なアイデア・ヒント的なものとして、京都の街中は案外緑が少ない印象を受けるので、点在しているお寺の緑を、回廊的に、飛び石的なものでも良いので、緑で繋いでいく方法がないかと思う。緑を増やす場合にはもちろん在来種が良い。東京都の「江戸のみどり登録緑地」という制度が参考になる。あるいは、在来種に関してこの種は自分たちが責任を持って保全しますよと、特定の種を選んでもらってスポンサーのようになってもらっても良いのではないか。

日本の里山の状態は、ここ10年、20年、全然良くなっていない。その大きな理由は、かつて使われていた自然資源が、今は使われていないからである。いくら週末に皆で里山に行きましょう、里山を守りましょうと言っても、量的に見合わない。里山里山を守るには、産業のサイクルに取り込んでいくしかない。前回も御意見があったが深泥池のジュンサイを食べるなど、積極的に使うことで利用不足(アンダーユース)を防ぎ、「これを使っているのだ」という意識を高め、更にはブランド化するなどの方策がないと、保全のための保全では予算も人手も限られ、面的には広がっていかないだろう。

また、最近プラスチックの問題が話題になっている。例えば京都の周りには、昔は使っていたが今は使われていない、竹や経木など、自然の素材が沢山ある。これをも一度使用し、発信するのであれば、私はぜひそれを京都でやってもらいたい。企業に提案することも可能だと思う。

さらに、エコツーリズムは単に自然に親しんでもらう以上に、オーバーツーリズム・

観光公害への対策として有効である。観光コースを作るだけでは使ってもらえないので、インタープリテーション（正しい理解を助けるよう説明すること）が重要。そこが魅力的になるといくらかでも人は来てくれるし、お金も落としてくれる。京都の場合は自然が伝統産業、食等と密接に結びついているので、それらを活かすと、かなり可能性があるのではないかと思う。

湯本部会長 「50年後に京都が消滅する」というのはショッキングな表現ではあるが、里地のチョウが消滅したと聞いても「ふーん」、「ちょっと寂しいが、私には関係がない」というのが普通の人の感覚で、そうした問題があると知っても、自分ごととして捉えられない、つまり危機感を持ってない、切実に感じられないことが、生物多様性の問題の本質だと思っている。

地球温暖化は、最近台風や水害もあり、やや危機感・切実感が迫ってきているが、生物多様性はまだまだ、自分ごとにならない。観光で成り立っている京都で、観光資源がなくなれば、危機感・切実感が他の都市よりも感じられるだろう。京都でできなければどこでできるのか、とも思う。

<長期的ビジョン（2050年のあるべき姿）>

湯本部会長 3 ページ目に記載のある「長期的ビジョン（2050年のあるべき姿）」、言葉遣いも含めて、スライド番号4について、御議論いただきたい。市民のみなさんに届くような言葉で書くように努力をいただいているとは思いますが、危機感・切実感が表現できているか。もう少し工夫が必要ではないかと思うので、色々アイデアをいただきたい。私としては、「京都ならでは」の要素が、今ひとつないという気がする。この「長期的ビジョン」はどこでも通用する内容である。それも大切だが、特に京都の人が危機感・切実感を持つような言葉が含まれていた方が良いのではと思う。

伏見委員 1つ目の「四季の変化を通じて自然を身近に感じられる」のところで「地球温暖化の緩和」と書いてあるが、これは既に失われているものがあるという前提で書かれているのか。何を意図されているのか、教えていただきたい。

事務局 地球温暖化が進むと四季の変化がなくなり、極論、夏と冬だけになってしまう。身近な自然へのアプローチとして四季を感じる事が重要であり、「地球温暖化が緩和」されなければ四季が残らない、という意味で記載した。

湯本部会長 生物多様性と地球温暖化の問題をリンクさせることは大切だが、ちょっと分かりづらい気もする。

伏見委員 地球温暖化とリンクさせるのは重要だが、生物多様性のビジョンであるならば、地球温暖化の内容から始まるのは若干の違和感がある。

石原委員 全体的に3行あって長いと思う。ビジョンが頭にぱっと出てこない。もうちょっとスリムに端的に、なおかつポイントを入れていくことが大事。そういう意味で、私も四季の変化は「？」と思ったところである。あえて入れるか、削るかは検討した方がよい。

2点目「豊かな生きものの恵みがしっかりと引き継がれている」の「生きものの恵み」という言葉は、生物多様性が私たちの生活にもたらす生態系サービスを表してい

と思う。生物多様性を守るという観点では、恵みがあろうがなかろうが守っていくという視点も必要である。一方で、社会が持続的に成り立っていくためには、特に恵みにフォーカスするということであると思う。豊かな生きものがいて、それを人間が使い、人間社会自体は持続的になっていく。文化、生活、また産業、京都であれば観光など。生物多様性は我々の生存の基盤になっているので、恵みはむしろ3番目「自然とともに文化や生活が営まれている」の部分に入っていくのではと思う。観光も、中国や台湾からの観光客は、ハードウェアを見るような観光が中心である。観光という産業を持続させるためにも、観光の質を変え、エコツーリズムや環境に配慮した観光を打ち出していくことが、観光産業の持続性に繋がっていくと思う。そうすることで、今まで生物多様性に関心がなかった分野の方たちにも取組が広がっていくのではないか。長期的ビジョンに「文化」と「生活」はあるが「産業」のイメージがない。社会全体として営み続けていけるというイメージを入れた方が良い。

湯本部会長 国際都市・京都なので、長期的ビジョンが英語で表現されることも想定しておかないといけない。生きものの恵みというと「エコシステムサービス」、「生態系サービス」といった言葉が知られているが、国際的には「生態系サービス」という言葉は使わなくなり、「Nature's Contributions to People (NCP)」という。環境省は、「自然がもたらすもの」と訳しているが、単なる恵みだけではない。「負の生態系サービス」という言葉も使っていたが、害虫が大発生するような大きい災厄や、落ち葉をなんとかしてほしいなどの小さい災厄まで、ネガティブ・否定的なものも併せて自然との関係性を評価しようというのがごく最近のトレンドになっている。生態系サービスという表現をNCPに置き換えていく流れが止められないのは明らであり、意識した方が良い。切実感でいうと、例えば、しなやかで持続可能なまちと、生物多様性とは結びつきにくいところではあるが、グリーンインフラのように、公園が災害時の避難場所になったり、草花を鑑賞したり、心穏やかにするという性質を考えた研究も進みつつある。いかに自分ごとにするか、生物多様性を単なるお飾りにせず、私達の生活に必須のものであるという切実感・危機感を盛り込んでほしい。

森本委員 ここで欠けている視点として、エコロジカル・フットプリントについての表現がない。外部エネルギーをどんどん投入して実現するのか。また部会長が仰ったように、緑の恵みをうまく活かしたグリーンインフラのような考え方で、地域循環共生圏的に、可能な限り他に迷惑を掛けないようにするには、生物多様性を基盤とする社会を目指す、という文言がほしい。そのためにはシナジー、複合的な機能を発揮するという視点が大事である。

足立委員 言葉の整理として、地球温暖化については、2番目の「豊かな生きものの恵みがしっかりと引き継がれている」にまとめても良いのでは。1番目の意識のところは、身近に感じられるというところを強調していただき、前提としては生物多様性がある、気候変動がある程度のところでは抑えられているというのが前提となる、とした方が混乱はない。

森本委員 1番目の「四季の変化」という部分は、抽象的かもしれないが、京都市的なニュアンスがあると思う。例えば、二十四節気が継続できるのは重要で、六角農場に二十四節気

のプレートがあったりする。自然というエレメントやパターンが浮かぶが、実はプロセス・自然の流れが大事であり、それが地球温暖化によって変わってきている。

足立委員 「四季の変化」が京都市で重要な要素であることを否定するつもりはない。ただ、1番目の長期的ビジョンは、一般の方に分かりやすいように、「感じられることが重要」ということを強調したい。「感じる」要素の中には、森本委員が仰ったように、二十四節気といった流れもあり、それも当然気候変動と絡んでくるという意味である。そこは整理のヒントとなる。また、「身近に感じられる」、「しっかり引き継がれる」など、表現がフワッとしているので、定量性があると、切実感に繋がるのではないか。先程も紹介したが、国際的には自然生息地の喪失がゼロになるとか、人間がもたらす絶滅がゼロになるとか、エコロジカル・フットプリントを半分にする、などが提言されている。そういうものを参考にすると良いと思う。

森本委員 山城原野という言葉が京都大学の先生に教えてもらったが、都市化が始まる前の生物相があったとして、そういうものが絶滅しない都市というものを共有できたら良いと思う。山城原野という言葉が魅力的だったので私は色々な所で使っている。山や川がそのままだったのではなく、氾濫があったり、糺の森のように流れがあったりもし、その中で生きてきた生きものがある。人間は都市化せざるをえなかったが、元からいた生物が絶滅しない都市を作るのが重要なミッションではないか。例えば、大阪では既に、かなりの植物がいなくなっているが、そういうことのない街にする。土地利用でダメなら、レフュジア（避難場所）を目標として掲げるというのも重要である。

足立委員 「身近に」といった時に、身近に緑があるかどうかの問題だと思う。鴨川や、お寺に行けば緑はあるが、家の周りなどごく近傍に、元々京都にあった緑を増やすというのを目標に入れてほしい。

湯本部長 事務局として数値目標を入れることは避けたいという考えか。

事務局 定量的な数値目標を置いていないのは、決して意図的なものではない。足立委員にご紹介いただいたような、生息域のロスゼロにする、人為的な絶滅をゼロにするなどの、世界的共通の目標があれば、当然それに向かって進むべきであろうと思う。特に5年、10年ではなく、2050年とした場合に、どのような定量的な目標が置けるのか、何を数値的・定量的なものとして示せるのか悩んでいる。是非ともこの場で御意見をいただきたい。

田中委員 目標・戦略を見たとき、誰がやるかというのが分からない。特に意識の部分に関していうと、市民が意識を持ってやる、という方向に持っていかなければいけない。具体的に我々市民がやるのだ、ということ盛り込んでどうか。

湯本部長 結局、生物多様性というのは環境管理課だけではできない。京都市、あるいは京都府や国も巻き込み、一見バラバラに見える政策を導き、方向付けて、位置付けることが必要である。だから主体を書きにくいところもある。これ自体は京都「市」のプランであり、環境管理課のプランではないので、庁内の調整も含めての問題となるということ委員の皆様にも意識していただきたい。

池本委員 長期的ビジョンについて思ったことは、生きものを守るために新しい仕事や事業を作ること大事だと思う。そうでなければ「誰がやるの?」という問題にも繋がる。2050

年のあるべき姿として恵みの有無に関わらず、自然や生きものを守っていくという仕事ができるということも大切なのではないか。

湯本部長 全くその通りだと思う。

板倉委員 エコツーリズムについて、NPO 法人「環境市民」が実施していたことがあったが、中学校や高校から多くの依頼がくるものの、ファシリテーターが圧倒的に不足、今は途切れてしまった。昔は関東の学校から、歴史やお寺ばかり見ても子どもが飽きるもので、御所の中の自然も見たい、という希望があった。年配の方は歴史のことは詳しいが、「ムクノキは何か」と聞かれても分からない。お寺を見るだけでなく、鴨川の水質を調べるとか深泥池の水質を調べる、水生昆虫を見る等を観光に入れていけば新しい産業になる。

湯本部長 苔ガイドとかもある。

久山委員 長期的ビジョンについて、問題ない文章だが、あるべき姿という「あるべき」という強い言葉に対しては、もう少し具体的に表現していかなければと思う。一人ひとりが生態系の一員という認識を持つのはなかなか難しい。もちろん期待したいが、その前に社会として、生物の多様性を認識する、社会化する、社会に定着させることが先ではないか。

それと、街中の緑を守ろうという一方で、緑を伴う町家がどんどん壊されていっているが、保全のためには様々な法的な制約がある。同様に社寺の森を持続するにも、お金も人も必要なことも加え、難しいところがある。大文字山を例に見ると、松枯れの後、再生が遅々として進まず、担い手も少なくなっている。現実を見据えて、こうあるべきだと、あってほしいということ、具体化して書くべきだと思う。担い手という言葉も盛り込む必要がある。

足立委員 スライド番号 5 について、外来種のことを一言入れておいたほうが良い。

湯本部長 環境省は国家戦略で第 1～第 4 の危機を示している。第 1 の危機としてフラジャイル（脆弱）な生態系や種を保全すること、第 2 が里山のアンダーユースによる荒廃。3 番が外来種、第 4 が気候変動等のグローバルな問題。第 3 の危機を全く書いていないというのはどうか、というところがある。

2050 年ビジョンについては次回に持ち越し、バージョンアップしていきたい。例えば先程の緑の登録についても、回廊化するとしたら民地に介入することになる。本当は税制改革が必要だが、なかなかハードルが高い。それに近い形で、「〇〇をすれば税金が下がる」などを考えないと、根本的にどうにもならないという意識はある。

<2030 年度の目標について>

湯本部長 スライド番号 6～10 の 2030 年度の目標について御意見いただきたい。特に「重要な地点の保全・再生」（スライド番号 7）については、どのような法的な担保があるのかということも含め、後程説明がある。

2030 年度の目標には進捗の評価方法が設定されている。環境審議会に部会の活動報告をする際に客観的指標と主観的指標（アンケートなど）を出すように言われているが、客観的な指標は難しいと毎回弁解している。例えば大気汚染に関する測定値や

ごみの量は、京都市が業務として情報を集めているために自然と情報が蓄積されるが、生物多様性に関するものについては、努力しないと情報が集まらないという問題がある。スライド番号 8 の評価方法にあるようなシチズンサイエンス（例：京の生きもの生息調査）を使わないと、業務として客観的なデータが入手できなことも、生物多様性の難しい側面である。進捗の評価方法は、数値目標があり、何かしらの推移が客観的に分かるものが望ましい。スライド番号 6～10 については、「重要地点の保全・再生」も大事だが、進捗状況を評価する客観的・主観的指標をどうするかという視点からも御意見をいただきたい。

石原委員 2050 年のあるべき姿があり、30 年までに何を到達する、40 年までに、50 年までには……というステップを見ると、この 10 年ではここまでしかできないが、その先は 2040 年までにやるという、そういう目標が本来あるのではないか。

事務局 資料のスライド番号 3 にあるように、今回はあくまでも 2020 年～2030 年の 10 年間の計画としている。本来は 2030 年度の目標だけで良いところではあるが、生物多様性の取組は単純に 10 年では評価しづらいということもあり、2050 年という中長期的なビジョンも掲げた上で、まずは 2030 年度までに何をやる、というのをこのプランで掲げていきたいと思っている。あくまでも、2030 年までの計画という位置づけの中で、こういった取組を行っていくのかを検討していきたい。

湯本部長 そのためには、2050 年のあるべき姿がどれぐらい数値目標的なのかにかかってくる。2030 年までにはこうでなければいけないという、バックキャストिंग、つまり目標を決めて、それまでにどれぐらいのことをしたら良いのかを決めていくという手法になるが、そこまで考えていくのか、というご質問だと思う。そこは 2050 年目標とセットに考える必要があるかと思う。

足立委員 生物多様性で食べる人、営んでいる人など、利用を増やしていかないと本気になれない。指標のところに、生物多様性の恵みを利用してどれぐらいのビジネスが売上に繋がっているのかを定量化し、それを増やしていく、あるいはエコツーリズムのインタープリターみたいなものも含めて、どれぐらい雇用が発生するのかなどを指標にすると、それだけでも意識が変わるのではないか。

もう 1 つは、市民が身近に感じるために、身の回りにある緑をどう増やしていくか。市が増やすパブリックな緑もあるが、家の周りもある。それらが緑の回廊としてどれぐらい繋がっているか、接続距離や、在来種がどのぐらいの割合なのかなども、指標にしていただけると進捗も見やすくなって良いと思う。

田中委員 守るべき指標、例えば絶滅危惧種を守るというのは設定しやすい。現実問題として、市内の動物については動物園に聞けということで、最近よく相談されるのがクマについてである。クマが市内に出てきたらどうすれば良いのかと聞かれるが、出遭わないようにしてと言うほかない。シカの食害もそうだが、守るべき植物も、シカも、人との距離をどう取っていくか、クマにしても人里に出てこないようにするにはどうすれば良いかなど、そのあたりの指標化が必要ではないか。自然を身近にと言っておきながら、人と自然の間にあるべき距離は測らなくてはいけない。現在そのような指標も必要になってきていると、最近強く感じている。

- 湯本部長 自然の恵みだけではなく、困った面も含めて総合的に考えるという視点が重要である。
- 田中委員 市内でも北区など、クマが出るため保育園の園児を外に出せないなどの問題が現実
に起こっている。そういう問題を置いて、自然を守れといっても市民には響かない。
- 湯本部長 そのとおりだと思う。落ち葉が大変だから街路樹を全部切っ
てしまえという人もいる。
- 足立委員 質問だが、クマの話でいうと、山の実が少なくなっているから里（市街地）に出
てくるのだと思う。実が少なくなるのは、単に気候変動の問題なのか、山が荒れていて実
が取れなくなっているのか。
- 石原委員 兵庫県などでは、山の実のなりが悪いと人里にクマが出没して被害が出るという
関係性がクリアに出ている。ただ、現状では、気候変動の影響で実のなり具合が変わ
っていることを示唆するデータはない。戦後、人工林が増えたという大きな流れも一
因である。やはり一番大きな問題と考えられるのは、人が住んでいるエリアと奥山の
間に里山（バッファゾーン）があったのがなくなり、人の住む場所と奥山がどんど
ん隣接するようになってきている。里山に人が入らなくなったり、農山村の人が減って
きているという問題が大きい要因かと思う。ゾーン（面）、エリア間の繋がりをどう維
持するか。緑の回廊は色々な生きものの移動にもなるが、同時にクマやシカの移動ル
ートにもなる。クマの出没情報を蓄積していけば、出没する前線が都市部に広がって
きていることがクリアに出てくるのではないか。
- 湯本部長 これらは関連施策まで含めて考える必要があり、何とか頑張れば管理可能な問題な
のか、不可能なのかという問題がある。施策を立てられないと目標があってもあまり意
味がない。なんとかなるのかどうかの見極めが大事で、空虚な目標、「それって何も
できないよね」というものにはなってほしくない。

<基本戦略について>

- 湯本部長 基本戦略（スライド番号 11～15）を含めて議論していただきたい。これらの戦略は
本部会や環境管理課だけでは絶対できないことなので、京都市の他部局の政策を方向
付ける観点で考えることが前提として必要である。ひょっとすると税制のように、国
などを巻きこまざるを得ないこともある。そこは、管理可能ではないところになって
しまう。
- 森本委員 2030年度の目標でも、もう少し具体的に考えたらどうか。例えば、祇園祭の粽を可
能な限り京都産のササで賄ってはどうか。頑張っても、担い手がいなくなれば継承
できなくなるが、やろうと頑張っている人達がまだいる。そういう人たちが頑張
れるような目標があると良いと思う。あと、里山ゾーンでの目標は市街地とかなり
違ってくるので、クマの話など、分けて考える必要がある。生物多様性の視点から、
これまでの緑地を見直すことも重要だと思っている。プライベートな緑も含め、公
園も問題があるが、逆にすごいポテンシャルもあると思っている。もう一度生物多
様性の視点から、京都市がパブリックな緑地の再編をやろうとすればできるのでは
ないか。これはみどり部局だけでなく、下水、道路などを一体化してグリーンインフ
ラ的に考える。地域循環共生圏は環境管理課の業務の範疇だと思うので、例えば地
域雨庭などであれば地域をベースに網をかぶせていただきたい。様々な部局が連携
して整

備することで、多様な機能を持つ場が創出できる。公園は、生物多様性の視点では、絶滅危惧種の域外保全の役割を果たし、防災・減災の視点では、集中豪雨に対するバッファにもなる。地域循環共生圏を武器に、あらゆる部局を巻き込んで、30年度までモデル的に取り組むべきと考える。真面目に考える必要があるし、面白いテーマではないかと思う。京都駅前などもやったが、もう少し面白いところも考えたい。

湯本部会長 生物多様性の主流化というのは、様々な政策について生物多様性に対する配慮がされているというものであるが、今でも京都市や京都府の他の部局で外来種を植えたりしている。そうではなく在来種を植える。そのためには在来種の種や苗が必要であり、供給することが産業にもなる。それが本当の生物多様性の主流化であり、木を植えるときに、それは京都に元々あった木なのか、元々京都にあった種でも遺伝子は地元のものなのか、といった配慮があってこそ初めて生物多様性の主流化、生物多様性に配慮した京都市であると言えると思っている。そういう目標づくり、関連施策など、具体的なものを基本戦略としたら良い。基本戦略というと割と抽象的だが、本当は具体的に、京都市でいうと「〇〇課」が関係している等、落とし込まないといけない。

6 ページ (スライド番号 11)、今のところ 2050 年というのが一番上にあり、次に 2030 年目標、基本戦略がある。この構造は分かりやすいだろうか。基本戦略と目標 1,2,3,4 とあって、矢印はあちこち行っている。二重構造で、こんなに複雑にすべきなのかなと思うが、いかがだろうか (スライド番号 11)。次の回にはこれが深くなっていくわけだが、こういう体系で良いか。

石原委員 本来は、例えば一番上の生物多様性自体を守るということであれば、種が絶滅しないみたいな目標があって、そのためには XX 部局が OO をする、という具体的なものが戦略かと思う。2030 年目標と戦略が非常に類似していると思う。

議題(3) 重点保全地域について

事務局 <資料 3-1 に基づき説明>

森本委員 関西広域連合が取りまとめた「関西の活かしたい自然エリア」も加えてはどうか。その中に入っている「巨椋池干拓地」を候補地に入れたほうが良い。あそこは排水口とかに昔の名残があり、干拓され、市営住宅まで建ってはいるが、重要な拠点であることに変わらない。

宇治川は向島ヨシ原だけが大事なのではなく多様な植物群落がある。国の管理する宇治川などでも京都市はグランド施設等として一部借りているが、スポーツ利用だけで生物多様性の視点からの利用ができていない。国としても環境保全を求めている。淀川河川敷の鶴殿のヨシ原のように、多自然河川づくりとして切り下げを行うなど、京都市がやる気になれば国も乗ってくれるはず。

久山委員 重点保全地域に関する資料 3-2 を見ると、いろんな法令によって地域が分けられているが、例えば私たちのフィールドでもある東山を見ると、東山と哲学の道と銀閣寺、これらは地域としてはセットである。同じエリアにあるものは分けずして評価せず、全体として保全する、という考え方も検討していただければと思う。もう 1 点、「4 つの基本戦略における関連施策」はもっと京都を意識した項目立てに

してはどうか。その中の1つとして、「三山の森林の多様性・森林再生」を挙げてはどうか。三山については、かつてから京都市の保全対象地域となっているので、三山を意識した書き方が必要ではないか。

また市街地の緑化について、京都は桜と言われるが、最近、その桜をめぐる話題が多い。天狗巣病で一度に桜がダメになるのでは、とか、クビアカツヤカミキリによる問題も発生しているなど、桜だけに頼っているとそのうち京都の緑環境は破滅するのではないかと思う。

湯本部会長 ソメイヨシノ主義は生物多様性からしたらおかしいところであるので、打ち破るのは京都からしかない。

戦略については、次か、その次の部会かは別として、京都市のどういう課がどういう施策をもっているかまで落とし込むべき。様々な施策をきちんと方向づけ、位置づけるというのは、このプランのかなり大きなミッションである。市の全体の施策を生物多様性の保全上間違った方向に導かないというのも、このプランの大事なところである。具体的に考えていくと、二重構造・2階建て構造はどうだろうか。

久山委員 次期プランの構成案は良いと思うが、言葉の重なりなどもあり内容が分かりにくい。

湯本部会長 目標を達成するための戦略とすれば、シンプルである。矢印がたくさんあると分かりにくい。

池本委員 意識・行動の基本戦略として、流行があると思う。例えば、少し前だったらふるさと納税が流行ったり、数ヶ月前であれば一時期ツイッターで話題になったタケの時計など、流行と自然とをうまく繋いでいくというのも、戦略としては大切だと思う。

湯本部会長 事業化ということかと思う。先程足立委員が仰っていたようにストローを竹で作るなど、それが「かっこいい」というところを、京都市で広げていかないといけない。

森本委員 「4つの基本戦略における関連施策」は、単にグルーピングされた状態である。多自然河川の整備は誰がやるのか。誰が何をするまで整理しておく必要がある。

あと、税制は確かに一番ハードルが高いが、もう少しハードルが低いものに課金制度がある。例えばドイツでは、敷地を自然地にしていけば、下水道への負荷が少ないため、面積に応じて上下水道料金を安くするという仕組みがあり、緑化も進んでいる。

「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度」はコストパフォーマンスが高い良い制度である。そういうものを上手く使って、皆がやる気になるようなインセンティブを持たせるのも良い。生物多様性に配慮した事業に対する認証制度などを、足立委員と一緒に進めているが、もう少ししたら主流化に役立つかなと思っている。そういうのが戦略となると思う。

湯本部会長 生きもののガイドを認証して、バッジを付ける人もいる。

足立委員 戦略の分け方が京都らしくないと思う。国がやっているのとほとんど同じである。京都らしくするのであれば、もちろん生物多様性は保全するが、保全は目標として、やはり景観を守るとか、文化を守るとか、産業を作るとか、産業を強化するとか、それぐらいでも良い。その方が、市民の方、事業者の方も理解できる。

もう1つ、例えば景観あるいは文化の中で、社寺が非常に重要である。社寺の庭の管理はそれぞれ独自に造園業者などが行っているが、一緒にアドバイスを言ったり、何

か仕組みづくりはできないか。それぞれ工夫されていると思うが、気候変動でコケが枯れるといった問題に対してどうするか。町家の綺麗なお庭をどう管理するか、これからお庭を作るための庭木ガイドがあっても良い。景観を守る・文化を守るための、ふるさと納税があっても良い。税金は難しいといっても何かをやらないと変わらないので、少しずつ発言していけば良い。すぐには無理でも、税制を変えるための提言をしていくのも戦略の一つである。あとは、税金以外の財源もある。民間だとクラウドファンディング、行政がやるならグリーンボンドがある。そういうものを使うと、より面的に拾いやすくなるのではないか。